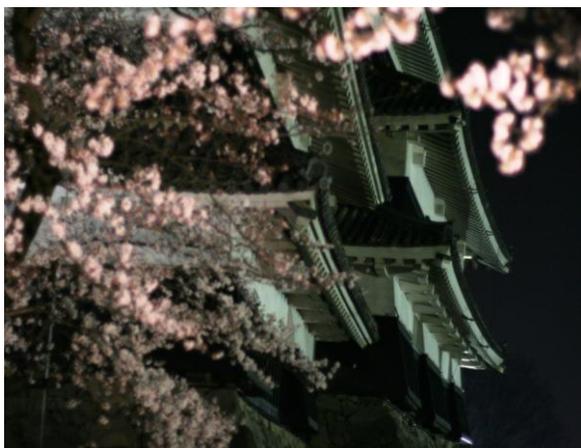


城に生きる姫物語



大きくなってお城の歴史を勉強するにつれ、このお話は史実ではないと知りました。けれどもそれが本当かどうかはどうでもよいことで、私は今も儚く水面を漂うお姫様の内掛けを、季節のお堀に重ねてしまいます。

松本城は黒く逞しい男性的な姿をしています、二十六夜神や姫物語といった、女性にまつわる話が多く、それらは今も生き生きと残っています。

お堀の周りには桜の木々が植えられ、春には淡い花びらが華やかに咲き誇ります。その桜葉は秋には見事な紅葉となって、鮮やかに散っていきます。松本の、母から子に語り継がれる物語。私も誰かに語り継いでいきたいと思います。

母から娘に語り継がれる昔話

小さな頃、母は私に沢山の昔話をしてくれました。その中に松本城の悲しい姫のお話があります。

「昔、松本城のお殿様が江戸のお殿様の妹をお嫁さんにもらった。それがそのお姫様は顔がみぐさくてね。松本のお殿様は美男子だったもんで、他の女の人と遊んでばっかりいって。だもんでかわいそうにお姫様は、お嫁に来た時に着てきた打掛を羽織って、お堀に飛び込んだらしい。ふわりとお堀の水に内掛けが浮いてるのを見つけた家来が探したけど、お姫様は見つからなんだみたいだよ」

その話を母は祖母から聞き、祖母は曾祖母から聞いて育って来たそうです。子供心にお堀を見ながら、水に浮く真っ赤な打掛を美しく想像したものです。



三沢 枝美子